



キッズリサーチ

中間ダイジエスト！

今年のキッズリサーチもいよいよ終わりが近づき、ありがたいことに三宅島大学本校舎は連日賑やかである。前号で初日と二日目の様子をお伝えしたため、今号は三日目から五日目までの様子を振り返る。

いないにも関わらず、それぞれの写真には個性が宿っていた、とキツズリサーチに携わるメンバーは語る。

四日目にあたる八月十五日の午後は、前日の「気になるもの」の写真を使用し、すగろくを制作した。大きな模造紙に簡単なコマ割りのみしておいて、写真の配置やコマの内容は子どもたちが考える、というものである。子どもたちは、模造紙に描いておいた海や山の絵と、昨日撮影した写真が合うように配置をしていった。完成したすぐろくで実際に遊んでみると、なぜか「スクワット十回」のコマで盛り上がる。スポーツに力を入れている三宅島に暮らす

「もの」を写真におさめさせた。そこに十枚までしか撮つてはいけないといふ制限が与えられ、子どもたちが厳選した「気になるもの」だけが写真に残るのである。前もつてなにかを撮ろうと考えているのではなく、いろんなことを発見しながら撮影しているようだつ

八月十七日の午後は、加藤文俊研究室が三宅島で発行している『あしたばん』を、子どもたちと一緒に制作する。去年は「三宅島の好きなところ」というテーマでつくられた夏休み特別号が、今年はまた新たなテーマで発行される。

そして最終日の八月十八日、午前十時から正午まで、成果発表会を三宅島大学本校舎にて行なう。子どもたちと一緒に制作した名札や絵、すみっこ、新聞が展示され、他已紹介ムービーが上映される。また、去年好評を頂いた「キッズボスター」が今年も並ぶ。これは、キッズリサーチに参加してくれた子どもを対象に、同研究室が制作す

らす子どものならではの反応だらう。五日目にあたる八月十六日。この日は、一人一組で「他己紹介」のムービーを録つた。ハンモックに乗つてみたりと、さまざま招き猫の前に立つてみたりと、さまざまなロケーションで撮影を行なつていが、三毛島大学本校舍周辺では、錆ヶ浜港が人気のようである。他己紹介の仕方もさまざままで、中にはオリジナルのニュース番組を作成しているところもあり、ここでも彼らの個性が光つていた。

な印象をもつているのだろうか。
わたしがお話を伺ったのは、徳井
人である。お子さんのしんたろう
二回目のキッズリサーチであった。
「親御さんにとって、キッズリサ
チはどう思われますか?」
「ありがとうございますね。しんたろう
毎日楽しみにしてて。『お母さん
日も朝からいくよ!』だからわたし
水筒にお茶をいれてね。うちに帰っ
ても、ごはん食べてすぐ寝て、みんな
遊べてよかつたねって、明日もい
て」と話してくれた。とても有り難
い言葉だった。

わたしたちには子供たちをつうじて、「三宅島の人びとの暮らしやその歴史を感じる」という目的がある。しかしそれだけではない。ある一定の期間だけ子供たちと触れ合っていれば、互いの距離が縮まり、仲良くなる。友達になる。夏休みの宿題やその他の授業について、子供たちにどうても、十分な思い出を共有しているのだ。そしてわたしたちが行なっているキッズプログラミングに、子供たちの親御さんばかり

A black and white photograph of a woman with short, dark hair and glasses, wearing a dark top and a light-colored scarf. She is positioned in front of a wall that is covered with numerous children's drawings, including various figures and shapes. The lighting is soft, creating a warm atmosphere.

(廣野吉隆)

るものである。来年のキッズリサーキーに繋げるためにも、今年のキッズリサーキーにおける集大成を親子で見に来て頂きたい。

今日も楽しみだ！つて。

わたしたちには子供たちをつうじて「三宅島の人びとの暮らしやその魅力を感じる」という目的がある。しかし、それだけではない。ある一定の期間だけ子供たちと触れ合っていれば、互いの距離が縮まり、仲良くなる。友達になる。夏休みの宿題やその他の授業をつうじて、子供たちにとつても、大切な思い出を共有しているのだ。そんなわたしたちが行なっているキッズリサーキーに、子供たちの親御さんはどんな印象をもつているのだろうか。

わたしがお話を伺つたのは、徳光さんである。お子さんのしんたろう君は二回目のキッズリサーキーであった。

「親御さんにとって、キッズリサーキーはどう思われますか?」

「ありがとうございますね。しんたろうは毎日楽しみにしてて。『お母さん! 今日も朝からいくよ!』だからわたしは水筒にお茶をいれてね。うちに帰つても、ごはん食べてすぐ寝て、みんなで遊べてよかつたねって、明日もいくつて」と話してくれた。とても有り難い言葉だった。

夏休みの宿題をやって、みんなと遊ぶ。カメラを使って遊んだり、ムービー

A black and white photograph of a woman with dark hair and glasses, wearing a white scarf, looking directly at the camera. She is positioned in front of a wall that is covered with numerous children's drawings, creating a textured, artistic background.

あしたばん
vol. 2



「何をやっているかわからない」が、讃め言葉

吉田さんはこれまで、アートNPOの事務局として行政と関わりながら、アートプロジェクト主宰していた。その経験が行政の立場として関わることへの興味に繋がり、三宅島大学事務局を務めるひとつのかつかけとなつたそうだ。「自分一人では動かせないことを色々な人とつくることで、自分が想像していたものを超える瞬間があることが面白さであり、難しさでもある」と話す。

三年目を迎える三宅島大学だが、実は役場として事務局が作られ

九月に開校二周年を迎える三宅島大学。今回、プロジェクトの実行委員会事務局の吉田武司さんに、お話を伺つた。

吉田さんはこれまで、アートNPOの事務局として行政と関わりながら、アートプロジェクトを主宰していた。アートNPOの事務局として関わることへの興味に繋がり、三宅島大学事務局を務めるひとつのかつかけとなつたそうだ。「自分一人では動かせないことを色々な人とつくることで、自分が想像していたものを超える瞬間があることが面白さであり、難しさでもある」と話す。

三年目を迎える三宅島大学だが、実は役場として事務局が作られ

たのは今年の四月からである。事務局として運営していく過程で、「数字が大きな割合を占めることが多いプロジェクト評価において、より定性的な、プロジェクト過程への理解を増やしていきたい」と話す。講座の参加人数を増やすことだけでなく、たとえ少人数の参加者の中で一人でも考え方方が変わると、それが、その過程をつくることに重きを置くことも大切だ。

そして何より村役場として行つて

いるからこそ、三宅島大学が島民の方により一層必要とされることが一番の目標である。「三宅島には海だけじゃなくて、大学がある」。そう言われる

ように文化として島に根付き、島民の方々が誇りに思えるような三宅島大学をつくっていきたいという。

今後を見据え、「講座やサークル活動を通じて、色々な人が自分自身の価値観を考えるきっかけとなるようなるとをしていきたい」と吉田さんは語る。「教える人だけでなく教わる人にとっても、それまで気付くことの出来なかつたことを考える時間を作りたい。三宅島大学は、ある人には観光、また別の人には福祉、さらにまた別の人は教育など、様々な捉え方が出来るプロジェクトだ。豊富な種類の講座をひらくことで、島民の方々が三宅島

について考える場にしていきたい」という。多様な講座やサークルを持つプロジェクトだからこそ、三宅島大学が何をやっているか分からず、と言わることが、讃め言葉でもあると話す。

普段はその和やかな雰囲気と会話が魅力的な吉田さん。今回の取材では三宅島大学にかけるアツい思いを淡々と語ってくれた。終わり際、「昨日決まりたばかりだけど……」と十一月からの講座についてもこつそり教えてくれた。これからも一人一人に響くような、新たな試みに取り組んでいく。まだお伝えすることの出来ないその講座については、三宅島大学からの情報発信を楽しみに待つて頂きたい。

(竹下 紗)

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。

午後は、海の近くまで足を運んで神様やご先祖様を供養する為に、一日中動くといわれている。十五日に神様やご先祖様を送り出して、翌日は彼らが帰路に立つ。その日に海へ入ると水面の下から足を引つ張られ、一緒に連れて行かれるという言い伝えがあるのだ。そのため島で建設業に携わる方々は、水難事故などに遭わないよう仕事をお休みするという。夏は海水浴客で賑わう海岸が、この日だけは静まる。

三宅島のお盆の過ごし方や風習は地域によってかなり異なる。例えば、阿古に住む方たちは十五日に「線香まわり」をする習慣がある。線香を手に持つて、自分たちにゆかりのある家をひとつひとつ訪れ、仏壇に線香を上げながら村を回るそうだ。その日船が出た錆が浜の港でもお線香が焚かれていたのを見にした。翌日にお墓参りをすると

（龍山千里）

キッズリサーチ

成果発表会を開催します。

8月18日(日)午前10時~12時

三宅島大学本校舎(御蔵島会館)

是非、親子でいらしてください。

お盆の過ごし方 尊ぶ心の表れ

尊ぶ心の表れ

中でも家庭によって仏教や神道など信仰の違いから習慣が異なるが、坪田はそれが分かれてしまはずら、ひとつにまとまっているところが他と比べてめずらしい。住民の方曰く、本土からより離れた方角に位置する坪田は、少し文化が特殊なのだそうだ。

他にも、神道の文化が根付いた神着ならではの風習があつたり、場所によつて様々なお盆の過ごし方がある。小さな島であるにも関わらず、島の反対側は天氣も違えば、根付いている文化もまったく違う。祭りやお盆の行事を通して、島の人々がご先祖様を尊ぶひたむきで真摯な心を感じられた。

一方で、坪田に暮らしている方たちは十五日にお墓参りをすることが多い。親族に限らず、近しい知人や友人などたくさんのお墓を回り、お線香を上げたりお供え物をすることが特徴的だ。十六日は午前中に住民の人たちが海蔵寺という寺院に集つて、住職さんにお経を上げてもらう。お焼香は、亡くなつた親族が新盆を迎える人、海で亡くなつた人などそれぞれに分かれて行なうそうだ。最後にみんなで踊りをおどつて、昼頃に一段落するという。